

令和 3 年 6 月 28 日現在

機関番号：62608

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23063

研究課題名（和文）室町後期における連歌師の講釈・注釈活動による源氏学の伝播と変容に関する資料的研究

研究課題名（英文）Materials-focused Research into the Spread and Transformation of Genji Studies through the Lecture and Commentary Activities of Late Muromachi-period Renga Masters

研究代表者

ノット ジェフリー（Knott, Jeffrey）

国文学研究資料館・研究部・助教

研究者番号：30847794

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、室町後期から戦国時代にかけて『源氏物語』の受容史に大きく影響した連歌師の講釈・注釈活動の実態を、現存する注釈資料の調査を通じて解明し、またその活動が果たした源氏学の地方への広がりや、その伝播過程において源氏学自体に起こった変容とを追跡することを目的とした。（1）連歌師宗祇の活動の解明、（2）宗祇門の重要な弟子、特に宗碩と兼載とその門弟の活動の解明、また（3）連歌師の活動を反映する源氏学関連資料の調査、以上3つの具体的な課題を設定して研究を行い、新型コロナウイルス感染症の影響を受けながら、入手できた一次資料に基づいて検討を重ね、連歌師による源氏学の実態把握を幾分進めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

その成立以来千年にわたり、様々な人に様々な形で読み継がれてきた『源氏物語』の歴史は日本文化史の縮図そのもので、またその発掘により、過去の読者が生きた時代はもちろんのこと、今我々が生きている、その過去の積み重ねがあつてこそその現代に対しても、より深い理解が得られよう。そして発掘現場として読者のため、読者の強い求めに応じて作られてきた各時代の注釈資料は大いに期待できる。本研究はその認識に立って、『源氏物語』の歴史の過渡期となった15～16世紀の注釈資料を対象に調査を進め、一時代の源氏学をより明らかにする一方で、こうした歴史的自己理解へのささやかな貢献をも試みたものである。

研究成果の概要（英文）：This research explored the massively influential Genji scholarship produced by certain renga masters of the medieval and warring-states periods, with a focus on their prolific lecture and commentary activities. Extensive surveys of surviving commentary texts sought to trace both how their teachings came to be so widely diffused and how that very diffusion came to shape those teachings in turn. The investigation centered on the following three topics: (1) the activities of the renga master Sogi, (2) the activities of Sogi's important disciples, above all Soseki and Kensai (along with their respective students), and (3) a broad-based survey of commentary materials that shed light on contemporary renga masters' Genji studies more generally. While facing the constraints imposed by the coronavirus pandemic, by making use of the primary sources accessible, the project was able to make some progress in furthering our understanding of renga masters' important Genji scholarship.

研究分野：中世の古典学

キーワード：源氏物語 受容史 注釈 連歌師 宗祇 室町 戦国 中世

### 1. 研究開始当初の背景

本研究の前提として、中世時代、主に13～16世紀までの『源氏物語』の受容史の大まかな流れを描き、その基本資料を紹介して整理し、その更なる考察が可能になる土台を築いた80年代以降の三十年にわたる文献学的研究の蓄積がある。特に伊井春樹、稲賀敬二、井爪康之等の業績が重要で、(1)それまで知られていた中世源氏学のいわば主流にあたる一連の注釈書(『河海抄』、『花鳥餘情』、『細流抄』等)に対する理解を一新させ、また(2)それまであまり注目されてこなかった注釈資料の発見と検討によって『源氏物語』の受容史に対するより重層的な、立体的な把握を可能にした。後者の資料群に連歌師の注釈活動を記録する文献も多分に含まれ、本研究にもその出発点を提供した。一方でこれまでの研究は、その段階での資料の限界もあって前者の「主流」の注釈書を軸に据えたことで、そういった業績を次々と輩出した当時の学問環境や人的交流とネットワークの検討、また「注釈書」の出来上がる背景にあった盛んな講釈活動の実態究明など、多くの課題を残した。

上記の先行研究に後接する本研究は、何よりもこの実態の把握を第一の課題にして、一部の残りやすく著名な注釈書のみから逆算し切れない、多様性にあふれた中世当時の解釈活動の様子を明らかにする試みである。この中で源氏学における重要性も認められながらその活動内容が未だに十分に解明されず、資料に残りにくい講釈文化とも、また資料を残しにくい公武の貴人以外の享受層とも関係が深いことで知られる、室町後期の連歌師の活動を中心の検討対象とする。先行研究が紹介した連歌師源氏学の資料に、代表者が閲覧した(これから閲覧する)資料を加えれば、写本一個一個の細密調査を以て、多くの有益情報が期待できる。

### 2. 研究の目的

本研究が対象とする室町後期の時代、『源氏物語』の研究史において連歌師たちが果たした役割が大きかったということは、様々な資料からはっきりしている。一番単純に後代の源氏学に影響を及ぼした、連歌師の手による注釈書(肖柏『弄花抄』、藤原正存『一葉抄』、能登永閑『萬水一露』等)もあれば、実隆の『細流抄』を始め後々まで三条西家流源氏学に連歌師宗祇の強い影響が見出せるというような状況も存在する。連歌師の貢献を抜きにして『源氏物語』の受容史が語れないというのは学界の共通認識で、もはや定説にもなっている。一方でこうした影響関係自体が認められる中、その業績の詳細、連歌師たちの具体的な活動内容については未だに不明なところが多い。本研究の目的はこの実態を解明することであり、連歌師たちが実際にどこまでの規模で、どれほどの範囲まで、またどのような解釈・講釈・注釈活動を、口頭伝授を含めどういった媒体を介して、誰に対して行ったか、現存する様々な資料の細密調査を通してそのより具体的な把握を試みる。

### 3. 研究の方法

本研究は連歌師の活動をより明らかにする統一目標のもとで、3つの具体的な課題を設定した。(1)連歌師宗祇の活動の解明、(2)宗祇門の重要な弟子、特に宗碩と兼載とその門弟の活動の解明、また(3)連歌師の活動を反映する源氏学関連資料の網羅的な調査を試みる。

#### (1) 連歌師宗祇の活動の解明

宗祇が記したとされる『源氏物語』関連の注釈類(『帚木別注』、『種玉編次抄』等)の悉皆調査を行い、またそれぞれの伝本に当たり本文異同の採集に留まらず、その書物自体が提供しうる限りの情報を集積する。成立までの宗祇学がどんな発展史を辿り、成立後にどんな流布経緯でど

んな享受層に使用され、どんな受容史で現在の形に至ったかを明らかにする。

#### (2) 宗祇門の連歌師宗碩と兼載とそれぞれの弟子たちの活動の解明

その注釈・講釈の活動内容を明らかにする目的をもって、宗祇の場合と同様に現存資料の伝本調査を行うが、同じく宗祇に師事した三条西実隆が確立した当家流の源氏学と正反対に、兼載門と宗碩門の資料が主に断片的に残り、宗碩の『源氏男女装束抄』、兼載の子孫にあたる長珊が残した『長珊聞書』等のようなまとまった著作がむしろ珍しいため、調査対象を例えば聞書類や書入本文等まで、広く設定する必要がある。

#### (3) 室町後期連歌師の源氏学に関連する資料の網羅的調査

宗祇門の資料を本研究の主な対象にしなが、今後の研究に資するためにも、今まで試みられなかった連歌師による源氏学資料の網羅的な把握を図る。該当する資料を幅広く調査し、そのデータを収集して系統的に整理した上、分析して当時連歌師の行動概要を明らかにする。

### 4. 研究成果

本研究期間中、新型コロナウイルス感染症の悪化・長期化により、一年以上にわたって移動を伴う一次資料調査の計画をほとんど断念せざるを得ないような状況が続き、研究計画の遂行に大きな影響を及ぼした。特に上記「研究の方法」の課題(1)～(3)の中から、当初の予定に従って令和2年度に最も重点となるべき(3)においては、移動制限等による遅延が認められる。その中で入手できた一次資料に基づいて検討を進め、各課題における研究の進展を以下に報告する。

#### (1) 連歌師宗祇の活動の解明

当初に設定された課題の中、宗祇による注釈資料の検討が全体的に一番の進展を見た。感染状況の影響を受けながらもその伝本調査を続け、特に『帚木別注』伝本の悉皆的調査においては諸本の相互比較・系統分類に関する成果が得られた。同じ宗祇の著作である『種玉編次抄』の伝本調査も進み、また全体的にも宗祇の著作に見られる注釈方針の分析に進展があり、その一部が研究ノートとして公開され、また近日に原稿化して発表する予定である。

#### (2) 宗祇門の連歌師宗碩と兼載とそれぞれの弟子たちの活動の解明

遠方への調査が叶わない中、所属機関の資料(紙焼きコピー等)を活用して、特に祇門の源氏学を豊富に伝えると思われる資料として、宗祇に師事した兼載の子孫にあたる長珊が残した『長珊聞書』の研究を進めた。その注釈方針を分析しながら宗祇の学問の受容を検討し、公開する予定の成果を得られた。また別の観点から、宗祇流の注釈資料の文学史における位置づけについても考察を試みて、国内外で口頭発表を行い、雑誌にも宗祇とその門弟による学術的貢献を概略的に考えた論文を執筆した。

#### (3) 室町後期連歌師の源氏学に関連する資料の網羅的調査

上述のごとく移動制限を受けて当初予定していたような網羅的調査ができなかった一方で、連歌師筋の解釈史を俯瞰した研究を進め、口頭発表が国際学会に採択されて現段階の成果を発信する機会を得た(感染症の影響で開催自体が研究期間終了後の2021年8月に延期)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 ノット・ジェフリ	4. 巻 復刊第二十九号
2. 論文標題 宗祇『源氏物語不審抄出』を通して見る兼良説継承の是非 三条西実隆『細流抄』の場合	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 平安朝文学研究	6. 最初と最後の頁 29-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 ノット・ジェフリー	4. 巻 32
2. 論文標題 特別講義「下剋上」の『源氏物語』 連歌師たちの仕事を振り返って	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本文学会誌	6. 最初と最後の頁 31-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 1件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Jeffrey Knott
2. 発表標題 A Question of Character: The Genji Commentary Revolution in Human Psychology
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies (EAJS) (国際学会)
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 ノット・ジェフリー
2. 発表標題 特別講義「下剋上」の『源氏物語』 連歌師たちの仕事を振り返って
3. 学会等名 盛岡大学日本文学会秋季研究発表大会（招待講演）
4. 発表年 2019年～2020年

1. 発表者名 Jeffrey Knott
2. 発表標題 The Splendor of Antiquarianism: Court Lore and the Poetics of Genji Exegesis
3. 学会等名 Asian Studies Conference Japan (国際学会)
4. 発表年 2019年～2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------